

2008年1月14日午後3時～午後6時

## シンポジウム『ヒューマンインタラクションの研究と教育 質的研究を中心に』

主催：埼玉大学 大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）

「ヒューマンインタラクションの文理融合教育」

場所：埼玉大学総合研究棟シアター教室、

話題提供：榎田美雄（徳島大学）&杉万俊夫（京都大学）、

コメンテーター：佐藤達哉（立命館大学）&榎村志郎（神戸大学）（予定）

### 第一報告

## 徳島大学榎田研究室における質的調査に関わる教育と研究の現在 - ユニバーサル化時代の大学教育改革としての意味づけの試み -

榎田 美雄

（徳島大学 総合科学部：kashida.yoshio@nifty.ne.jp）

### 【発表要旨】

ユニバーサル化時代（希望者全入時代）においては、大学教員は学生の学問的探求心を初期値としては期待できない。教員はまず学生の探究心に火をつけることから授業を構想しなければならない（専門分野に関心を持っていることなど到底期待できない）。

この困難を解決するために「文理融合的質的調査の体験学習（ICTを活用した社会調査）」は意義がある。学生は新聞は読まないかも知れないが、「デジカメ」の取り扱いには習熟している。「図書館で本を読むこと」は好まないかも知れないが、「街歩き」はよろこんで行う。「珍しいもの」を見て回ることはとても好きである。街でなら、ついでに学際的実践的思考をしたりもしてしまう。ならば、学生といっしょに「街」にでて「デジカメ」を使う体験学習の組み立てがあっても良いはずである。そこに、現代社会学の新展開の芽があるかもしれない。

報告者は教養教育の授業においてこれまでも学生を外に連れ出すことが多かったが（橋のデザイン見学、護国神社探訪、刑事裁判見学等々）、近年は「ユニバーサル徳島マップ」（<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/universal/tyuui.html> 参照）という実践的社会調査企画と連動して授業の組み立てを行っている。今回は「大学教育のフィールドワーカー」として、自らのそれらの活動（全学共通教育「社会学概論」等での活動）に基づいた報告を行う。初歩的ながら、知識社会的&高等教育論的検討も試みた。ご批判・ご意見を、頂ければ幸いである。

### 【キーワード】

大学のユニバーサル化、アンドラゴジー、文理融合的質的調査、大学教育実践の社会学

### 。議論枠組み：ユニバーサル化時代の教育の矛盾をどう実践的に解決するか

- 子供の学習理論（ペダゴジー） vs. / & 成人学習理論（アンドラゴジー）

#### （1）**社会状況**：ペダゴジーからアンドラゴジーへ（池田1987参照、cf. 医学教育改革）

現在の大学教育の困難を考察するに当たっては、<ペダゴジー>と<アンドラゴジー>に関する、近年の教育学者達の議論を援用して考えるのが好適である。

「図1」および「図2」のような対比がもし<ペダゴジー>と<アンドラゴジー>の間にあるのなら、大学教育にふさわしい教育法として<アンドラゴジー>的なものが望ま

れるようになるのは当然であるといえよう。

**【図1：ペダゴジーとアンドラゴジーの概念的対応関係】**（大西 2005 a、b）ほか

ペダゴジー	アンドラゴジー
《児童・生徒向け》	《成人・生活者向け》
人生経験がない	人生経験がある。生活もある
&	&
知識獲得が重要	問題解決（能力の向上）が重要
教室で詰め込む	生活の中で、教える（参加者中心主義） 体験学習、実践教育

**【図2：アンドラゴジーと親和性を増す現代生涯学習社会】**

知識の耐用年数が短縮化 & 終わらない青年期 = 生涯学習社会の到来

現場で学び続ける態度の養成が重要に！  
社会の複雑化 & 諸領域でのフレキシビリティの増大 = 知のストックの価値が低下  
共同作業の意義は増大

知の収集・加工・運用能力の養成が大事！  
×ペーパーテストに答える能力  
仕事を共同してこなせる能力

||  
ペダゴジーからアンドラゴジーへ

(2) **大学の状況**：大学生の生徒化（大学なのに、学生はペダゴジー適応的に？）

ところが、大学側の状況として、入学生の資質を考えてみるならば、むしろこちらにおいては、アンドラゴジーよりはペダゴジーと親和性を増しつつあるような趨勢が存在しているように見える。

**【図3：ペダゴジーと親和性を増しつつある大学教育の事情（非専門職養成系学部）】**

エリート養成時代	ユニバーサル化時代
自発的学習意欲あり	自発的学習意欲なし
専門職に就くことができる	一般的対人サービス労働者
放置していても学ぶ	手取り・足取りが必要にみえる
教員は先達者	教員は対人サービス提供労働者
大学構成員としての学生	対人サービスの消費者としての学生

(3) **プラン**：「社会の状況」対「大学の状況」という矛盾をどう乗り越えるか

この対立的な状況下において、我々はどのように振る舞うべきか。まずは、取りうる選択肢（プラン）を対比的に2つに描いてみよう。

【図4：取りうる2つの戦略の仮説的対比図】

<社会の状況に合わせる>  
教育のアンドラゴジー化戦略

vs.

<大学と学生の事情を優先させる>  
教育のペダゴギー化戦略

大学教育改革 A (学生を各専門家として処遇)  
例：実践的学習機会の提供 (今回報告)  
学生の ICT 技能の活用 (＃)  
(2002 秋日社報告：生活研究トピ/EM)  
(2005Fujimori ら、2007 榎田ら a、b)

大学教育改革 B (ペダゴギー技能の向上)  
例：エデュテイメントの提供 (島田 2001)  
導入教育の充実  
(2002 秋日社報告：EM の蓄積のノウハウ外さ)  
(2002 夏榎田、徳大 F D 研究会報告)

×短期：資源不足・機会不足  
長期：研究に結びつけば持続

短期：工夫すれば成功  
×長期：社会的期待の不充足

資源調達に成功し、研究プロジェクト化すれば、  
大学の現代社会適応のモデルになりうる  
成功像：研究と教育の新統合モデル

学部教育イメージの改革 + 専門研究の持続で、  
大学への支援 & 教員意欲の維持可能  
成功像：漸進的改革で現状と接続のよい未来

大学研究改革 A (文理融合系実践研究)

大学研究改革 B (学士課程教育と研究の分離)

擬似的実践性、イベント的学際性問題！  
例：「文理融合的質的調査の研究プロジェクト化」  
問題：研究内容の希薄化 (言い訳としての教育)

地方国立大はこの変化への対応の途中  
例：「IT エデュテイメント学部教育 + 研究大学院」  
問題：二兎を追うことによる教員の疲弊

- - この対比構造の存否を吟味 - -

(4) **主張**：「質的調査の質的調査」を通した「大学教育実践の社会学」の試み

上記(3)で描いたどちらの改革プランも、選択肢としてとりうるが、地方国立大の事情にフィットし、社会学および質的研究の可能性を十全に発揮させるのに好適なのは、左側の改革プラン(大学教育改革 A：アンドラゴジー化戦略)ではないと思われる。

以下では、そういう見通しにたつて、アンドラゴジー化戦略にたつた実践の報告と分析を行う。けれども、右側のペダゴギー化戦略を全面的に否定する訳ではない。実際には2つの改革プランは、相互浸透した形で実践されており、これらを明確に分けて考えることはできない。

というのも、左側の改革プランを実践する場合には、「擬似的実践性問題(シミュレーションの困難性問題)」が自動的に伴うことになるからである。すなわち、学生に直面させる問題に実践的な質を与えようとすればするほど、場面の作り込みを丁寧にしなければならない、ぎゃくに「仮想的な場面設定」となる必然性が強まってしまう。そうかといって、学生を現実に放り出すと学生はその現実をアンドラゴジー的に学ぶ基礎的能力を持っていないので、うまくいかないからである。

動画提示(1分2秒 = DVD =)

(Fujimori ら 2007 = **データ1参照**：kyokotsu\_SP\_auto\_kao\_kakushi\_B2\_113746\_113813・胸部診察 O S C E：診察状況が試験化されると、診察の試験状況が場面のセッティングとなる！11:38:04 秒の SP の動作に注目(27秒)、および、**データ2参照**：boston\_7thneck\_vertebra\_vol3\_101318\_long\_title・第7頸椎の10:13:27 秒の S P の動作も同様(12秒)。さらに、**データ3参照**：Hさん発話・11:53:07 秒の医学生の紅斑発言に注目(22秒)。)我々はさらにさまざまな大学教育の場面で同様の事例を集めつつある(榎田ら 2007 a、b)。

これらの研究で発見されたことに少しの推測を加え、さらにべつの表現をすると、以下のようになる。すなわち、専門化が高度に進行した現代社会では、現実の諸制度的場面で通用している「実践的思考」は状況別にたいへんに精密に細分化されてきている（ことが有意味になっている）。これに対し、大学がもっている現場性・実践性や専門知識的ノウハウは（いまや）不十分なものであり、大学の学士課程教育が現在提供している「実践教育」は、いってみれば「擬似的実践性」しか持ちえていないのである。結果として、アンドラゴジー戦略において大学が提供している環境は、その制度的場面对応的な質を維持しようとする「制度的場面に対する、特殊大学的な近似環境」にならざるを得なくなる。つまり、「疑似性」につよく汚染されていくしかない。ところで、これをさげようとする、「制度的場面性」を薄めるしかなく、限りなく（大学生の）日常に近づいていくことになる。そのとき大学は、ホンモノの環境を提供できてはいるかもしれない。しかし、提供する行為の価値は低くなる。ただし、このような場合でも、社会学教育の面からは意義があるかもしれない。具体的には「生活者＝生活の専門家＝としての学生に対する実践場面の提供」者として社会学教員は価値があるかも知れない。

ここまでの議論をまとめよう。社会的要請に応えようとする、アンドラゴジー戦略をとることになる。しかし、そうしようとしても、「制度的場面を学習する学習者にとっての擬似的実践性の養成」となってしまう。つまりその疑似性を受け入れるか、「日常生活の実践者の養成」という方向で活路を見いだすかに転換をしていくしかない。

このような転換された実践性が社会的に容認されるのは、結局のところ「学生の学習意欲を惹起する」という働きに意義があるからであり、「体験学習」一般が「学習体験」一般として、一般的な学習能力の向上に価値を持つだろう、と予想されるからに他ならないだろう。これは、実質的には、右側のペダゴギー的戦略の価値、すなわち、教育のエンターテイメント化（エデュテイメント路線）の価値とたいしてかわりはないといえよう（学生の学習体験をとりあえず促進することが目標とされている点で目標を共有しているからである）。【図 4】の左と右が、そういう関連性を持っている図式である可能性があることを踏まえた上で、なおかつ、アンドラゴジー路線（左側の戦略）にどのような具体的な形がありうるか、をここでは検討していきたい。つまり、全体としてのねらいは「質的調査の質的調査」を通した「大学教育実践の社会学」である。教育学における「ペダゴギー vs. アンドラゴギー」の対比に関する理念的議論をそのまま現実に照応させる形で採用するのではなく、21世紀の大学が置かれた具体的な状況に合わせて、実際の教育場面のデータに基づいて、起きていることを詳細に吟味していく形での研究が可能だし必要である、ということをも主張していきたい。

## 。やったこと：ユニバーサル・デザインのための「街歩き&WS」とその分析！

### - 「街」と「写真（フォトチャット）」の活用イベントと、その社会学的研究 -

#### （1）授業のなかでやってきたこと

下記「表 1」のような内容で毎年の共通教育授業を企画し、授業内社会調査および、「調査の調査」（ほぼ毎回ビデオ撮影を実施し、日誌的記録も取っている）を実践した。前提となるベタの社会調査部分（ICT 技術を活用したユニバーサルデザイン調査部分）に関しては、各方面の支援をうけて、かなり大々的に行って行くことができた。学生の達成感も強く、少なくとも学生の授業満足度の高さからみて、授業を通して学生のアンドラゴギー的学習意欲を高める、という課題は果たし得ているように思われた。

### 【表1：ICT技術活用授業の概要】

対象：全学共通教育「社会学：生活の中の社会（2007年のみ社会学概論）」履修学生（2004年度、05年度、06年度、07年度、全学部、20～30人弱）  
日時：2004年12月1日および12月8日、2005年、2006年、2007年も同様  
場所：徳島市、大学構内、市民病院周辺、藍住町他。後作業は徳島大学内CALL室等  
したこと：建物内部と市街地等をユニバーサル・デザインの観点から点検。写真撮影。

なお、2007年は、総工連携を目指し、京大開発の「photocat」の活用と、「photocat」利用WS（ワークショップ）のビデオ撮影も行った。街歩きイベント後の学生課題は、写真にコメントを付けてネット上の「UD 徳島マップ」にアップすること。例年、一班で10個の写真の加工&アップを義務づけている。

（<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/universal/tyuui.Html> 参照）

「ユニバーサル徳島マップ 6. 徳島市内全図」等にアップ中。  
「photocat」等については、**資料1**を参照。

### （2）狙いと評価：調査の調査による、文理融合教育イベントと社会学研究の融合へ

では、具体的には、この「質的調査実践」にはどのような意義があったといえるのだろうか。ポイントは2つある。ひとつは、それが教育的に有意義かどうかである。もうひとつは研究的に有意義かどうかである。この両者の総合的評価として、大学改革適格的かどうかという判断をすることも可能であろう。このような見通しのもとで、2004年から2007年に掛けての「質的調査（文理融合実践）」と「質的調査の質的調査（調査の調査実践）」の両方の実践を評価してみよう。

まず教育面から。

これは、文理融合実践部分だけの評価から、意義があった、と言っていいのではないだろうか。項目として「街」と「デジカメ（2007年はフォトチャット）」の2つをたてながら考えてみたい。まず、「街」を扱ったことの価値としては、とにかく「記憶に残る」という効果が大きかったように思われる。私は毎学期終了時に大学指定のものとは別に個人的に学生による授業評価アンケートを取っているのだが、「街」歩きをした授業は、このアンケートにおいて、記憶に残っているのは「××にいったことです」、と言う形で肯定的に言及されることがとても多かった（余談：樫村志郎先生の写真撮影による秩序研究もそのように評価されているのではありませんか？）。座学の教育効果の低下に比べて「体験学習的質的調査」は、学生の記憶に残る、と言えそうだ。手間暇がかかる部分を、文理融合研究企画だ、という形で研究費取得して補うことに成功するなら、目指すに値するだけの効果はあるといえよう。

ついで、「デジカメ」等のICT機器利用の価値もかなりあるように思われた。これらは、学生の自発性を喚起するよい小道具になっていたといえよう。今の学生は、高校まででかなりの程度、ICT慣れしている。たとえば、画像加工ソフトに習熟していたある学生は、撮影した写真（**写真1**：男子トイレにも、幼児用のおむつ交換ベッドがあるというサインを撮影したもの）に黄色の矢印と説明文字を付加して、かつ、重要部分をハイライティングしていた。このような作業が自発性をもってなされていることが重要である。この自発性は、教員が学生より優れていることが明らかな技術領域では起こりにくい類の自発性だったといえるのではないだろうか。

また、「フォトチャット」を活用したワークショップ運営においても（2007年）、新しい道具は人々の活動のなかに即座に埋め込まれた形で活用されていた（**写真2**）。さらに、これらが「カキコまっぷ」（簡易GIS活用の掲示板）に書き込まれている。

以上の議論をまとめると「表2」のようになるだろう。

【表2：「街」と「デジカメ&フォトチャット」の価値】

「街」の価値：インパクトあり（学期終了時アンケート時に「覚えている」！）。  
「デジカメ」等の価値：（教師よりもなれているので）かってに工夫して作業をする！  
自発性喚起の「実践」にもなっている。アンドラゴジー戦略。  
（資料「学生がICT機器を実践的に活用」[「写真1&2」](#)参照）

ついで、研究面から。これは、「文理融合質的調査」部分の研究も、「質的調査の質的調査（調査の調査実践）」部分の研究も、いずれもがまだ実践途上であるがゆえに、評価できる段階に達していないと言わざるを得ない。けれども、我々のチームは、前者については、とりあえずの中間成果（米谷ら 2002、樫田ら 2005）を挙げることに成功している（たとえば、これらの研究では、『ICT 活用型の福祉社会化促進ツール』を、権利要求型ではない、新しい市民の政治参加の形として評価しようとしているが、そのことの「ネオリベ社会化」との関連性把握は今後の課題となっている）。また、後者に関しても、ワークブレイス研究（たとえば、新しい技術に接した人間がどのようにその技術と従来の協同的業務処理のやり方を接合しているか、という観点からの文化社会学的研究）として考えれば、「119番通話研究（消防本部通信司令室の研究）」（たとえば、樫田 1995）以来の研究実践実績が我々にはあり、成果を出していける展望はある。おそらく 2008 年 3 月末までには、「家族の未来に関するワークショップのビデオ分析」（2007 年 6 月 9 日実施の WS の研究）ともども、「フォトチャット活用実践のビデオ分析」においても、このメタ的研究領域での研究成果を出せるのではないだろうか。希望的観測をいえば、この 2 つの研究領域がともに成果を上げ始めたときには、それらが相乗作用的に働いて行く可能性もあると思っている。さらには、ひるがえって、これらの研究成果が、教育実践部分にも肯定的影響を与える可能性があるのではないかと、とも思っている。すくなくとも、教員の参加意欲増進にはなることだろう。

（3）今後の展望：社会学の強みを生かしていきたい

すなわち社会学をやっているならば、それでよいのではないかと、という批判（素朴な疑問）もあるだろう。けれども、徳島大学には「社会学講座」はないのである。学生も、大学経営者も「違ったこと」「新しいこと」を要求してきている。この困った状況に立ち向かいつつ、「社会学」を続けていくためには、逆説的になるかも知れないが、「文理融合質的調査」を活用した授業や、そのメタ的研究という教育研究方略を構想するしかないのではないだろうか。

その実践のなかにこそ、の（4）で述べたように、「実践」が「擬似実践」でしかないのではないかと、という問いの発見などの研究対象の実質的発見がありうるのではないだろうか。社会的現象ならばすべてが研究対象になりうる、というところに社会学の強みがある。それは、対象が定まっている教育学とも違う、目的が定まっている工学とも違う、社会学の強みだ。研究の継続を期したい。

。まとめ

- （1）文理融合的实践（たとえば、新学術領域企画「インタラクション環境の創造 質的研究の新時代」（仮題））は、大学の新時代と相性がよいように思われる。また、社会学は、文理融合的实践のパートナーとして、教育面からも研究面からも考えることができる（究極的には、「文理融合实践の社会学」という関わり方もあり得る）。
- （2）文系地方大学の質的調査関係者の理論武装の試みとして、本発表は大学での（社会学による）「質的調査研究」と「文理融合的实践」の組み合わせ戦略の可能性を検討した。
- （3）「質的調査（エスノメソドロジーを含む）」と「文理融合」との組み合わせは、教育ネ

タとしても、研究ネタとしても、時代適合的/大学改革適合的であり得るが問題もある。  
前提：大学教育が遭遇している困難として、入学学生が大衆化する一方で、教育の目標  
が生涯学習に対応した物（学習能力の学習）に変化している矛盾がある。  
対処法：対処法は複数あるが、「文理融合的質的調査の体験学習」はその一つである。  
残された問題：体験学習の資源確保問題と研究への接続問題が課題だが、その一方で、  
より深刻な問題として「実践（環境）の疑似性」がある。

（４）ただし、上記戦略は、徳島大学という文脈（地方大学として、オーソドックスな学問分野中心の研究企画を推奨されないという文脈、すなわち、学際&実践志向の研究教育路線をとることに強く誘導されているという文脈）に枠付けられた戦略である。都市の研究大学には当てはまらない面も多いだろう。そういう限界性は認識しておきたい。

【写真１：学生が「ユニバーサル徳島マップ」への入力時に写真を加工した例】



（2004年）

男子トイレにも、おむつ交換台がある！

【写真２：学生が「フォトチャット」を活用してWSをしているようす】



川の両岸が比較されている。その場での書き込み機能が有意義に活用されている  
（2007年）

= 文献 =

- 赤尾 勝己 1998 『生涯学習概論 - 学習社会の構想 - 』関西大学出版部。
- Fujimori, Yoshimitsu・Kashida, Yoshio・Okada, Mitsuhiro・Terashima, Yoshiyasu 2007  
“Examining Examinations-on logic of practices in OSCE -” in 『徳島大学 社会科学 科学研究』第20号：57-73。  
(PDFファイルを公開中。http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/socj20-4.pdf)。
- 池田 秀男 1987 「成人教育学の原理 - アンドラゴジーとは何か」 in池田秀男・三浦清一郎・山本 恒夫・浅井経子『[生涯学習テキスト] 成人教育の理解』実務教育出版。
- 伊藤英明・榎田美雄・尾崎史典・齋藤ゆみ 2008 「熟練技能中心設計によるイノベーションの創出」 in 『情報処理学会論文誌 (IPSJ Journal)』49-4:頁未定 (掲載決定済)。
- 榎田 美雄 1995 「119番通話における緊急電話らしさの達成」, 『年報社会学論集』, No.8, 227-238頁。
- 榎田 美雄2002 a 「授業評価アンケートにおける学生の自由記述の分析」、徳島大学総合科学部自己点検評価専門委員会編『総合科学部FD報告2002』徳島大学総合科学部:20-31。
- 榎田 美雄 2002 b 「社会学教育の困難と社会調査実習の可能性 - 社会学入門科目としてのエスノメソドロジエ的社会調査実習のすすめ - 」, 第75回日本社会学会大会シンポジウム口頭報告レジュメ (2002年11月17日 at 大阪大学豊中キャンパス:大阪)。
- 榎田 美雄2005 「IT (ユニバーサル徳島マップ) を活用した体験学習の試み - 学生の探求心を惹起する為に「街」と「デジカメ」を活用する - 」 in第53回中国四国地区大学教育研究会『分科会 人文・社会科学分科会B (社会科学) 「ユニバーサル化時代に向けた新しい授業実践の試み」』発表レジュメ (2005年5月at徳島大学常三島キャンパス共通教育棟:徳島)。
- 榎田 美雄・竹岡 勝行・真鍋 陸太郎2005 「『かきこマップ』と連動したユニバーサル・デザイン調査の可能性 徳島県郷土文化会館UD 調査の事例から 」 『徳島大学社会科学 科学研究』第19号 P.231-250。
- 榎田美雄・岡田光弘・五十嵐素子・宮崎彩子・出口寛文・真鍋陸太郎・藤崎和彦・北村隆憲・高山智子・太田能・玉置俊晃・寺嶋吉保・阿部智恵子・島田昭仁・小泉秀樹  
2007 a 「実習型の授業のビデオ・エスノグラフィー (1) - 「PBLチュートリアル」と「フィールドワーク」のビデオエスノグラフィーによる解明 - 」 in 『I S C A R (国際文化活動研究学会、International Society for Cultural and Activity Research) 第1回国際アジア大会 - 活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン - 』口頭報告 (2007年9月6日at武蔵工業大学環境情報学部:横浜)。
- 榎田美雄・岡田光弘・五十嵐素子・宮崎彩子・出口寛文・真鍋陸太郎 2007 b 「高等教育改革のコミュニケーション分析 (1) - 研究の狙いと工学部都市工学演習の実際 - 」 in 『第80回日本社会学会大会』一般研究報告 (2007年11月17日at関東学院大学金沢文庫キャンパス:横須賀)。
- レイブ&ウエンガー1993 『状況に埋め込まれた学習 - 正統的周辺参加 - 』産業図書。
- 大西 弘高 2005a 『新医学教育学入門 - 教育学中心から学習者中心へ - 』、医学書院。
- 大西 弘高 2005b 「研修カリキュラム開発」 (日本家庭医療学会家庭医療後期研修プログラム構築のためのワークショップ = 第1回 = 配付資料。2005年10月16日。)
- 島田 博司 2001 『大学授業の生態誌 - 「要領よく」生きようとする学生』玉川大学出版会。
- 社会教育基礎理論研究会編1991 『学習・教育の認識論 (叢書 生涯学習 )』雄松堂出版。
- 館 昭1995 『転換する大学政策』玉川大学出版部。
- 館 昭・岩永雅也2004 『岐路に立つ大学』財団法人放送大学教育振興会。
- Trow, Martin 2000 『高度情報社会の大学 - マスからユニバーサルへ - 』玉川大学出版会。

上野 直樹1999 『仕事の中での学習 - 状況論的アプローチ - 』東京大学出版会。

潮木 守一2004 『世界の大学危機』中央公論新社。

米谷 隆雄, 荒尾 五郎, 中林 久美子, 前野 洋子, 影石 公昭, 太田 能, 毛利 公美, 森井 昌克, 榎田 美雄 2002 「地域ボランティア福祉活動支援情報通信システムの運用-徳島県海南町福祉支援情報通信システムの開発・展開事業-」, 『信学技報』, No.111, 15-20頁。

吉田 一郎・大西 弘高編著2004 『実践PBLチュートリアルガイド』南山堂。

### = 付記 =

本報告は、文部科学省科学研究費補助金「高等教育改革のコミュニケーション分析 - 現場における文化変容の質的検討 -」（基盤研究（B）、平成18年度～平成20年度、課題番号18330105、研究代表者：榎田美雄）、文部科学省科学研究費補助金「医学教育のエスノメソドロジー - 医療面接実習とOSCEの相互行為的基礎 -」（基盤研究（B）、平成15年度～平成17年度、課題番号15330100、研究代表者：榎田美雄）、徳島大学学長裁量経費「徳島大学における人文・社会科学データのデジタル情報化及びその地域貢献に向けての総合的システム開発」（社会技術科学推進研究、平成16年度～平成19年度、研究代表者：榎田美雄）による研究成果の一部である。

榎田美雄の連絡先は、〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地 徳島大学総合科学部。

e-mail : kashida@ias.tokushima-u.ac.jp、TEL&FAX : 088-656-9308 (ダイヤル)。

WWWサイトのアドレスは、<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>。

静止画:Examining Examinations:on logic of practices in OSCE (Fujimori etc. 2007) より



Figure1 .

The arrangement of four participants in OSCE



Figure3 . A medical student's orientation to the examiners.

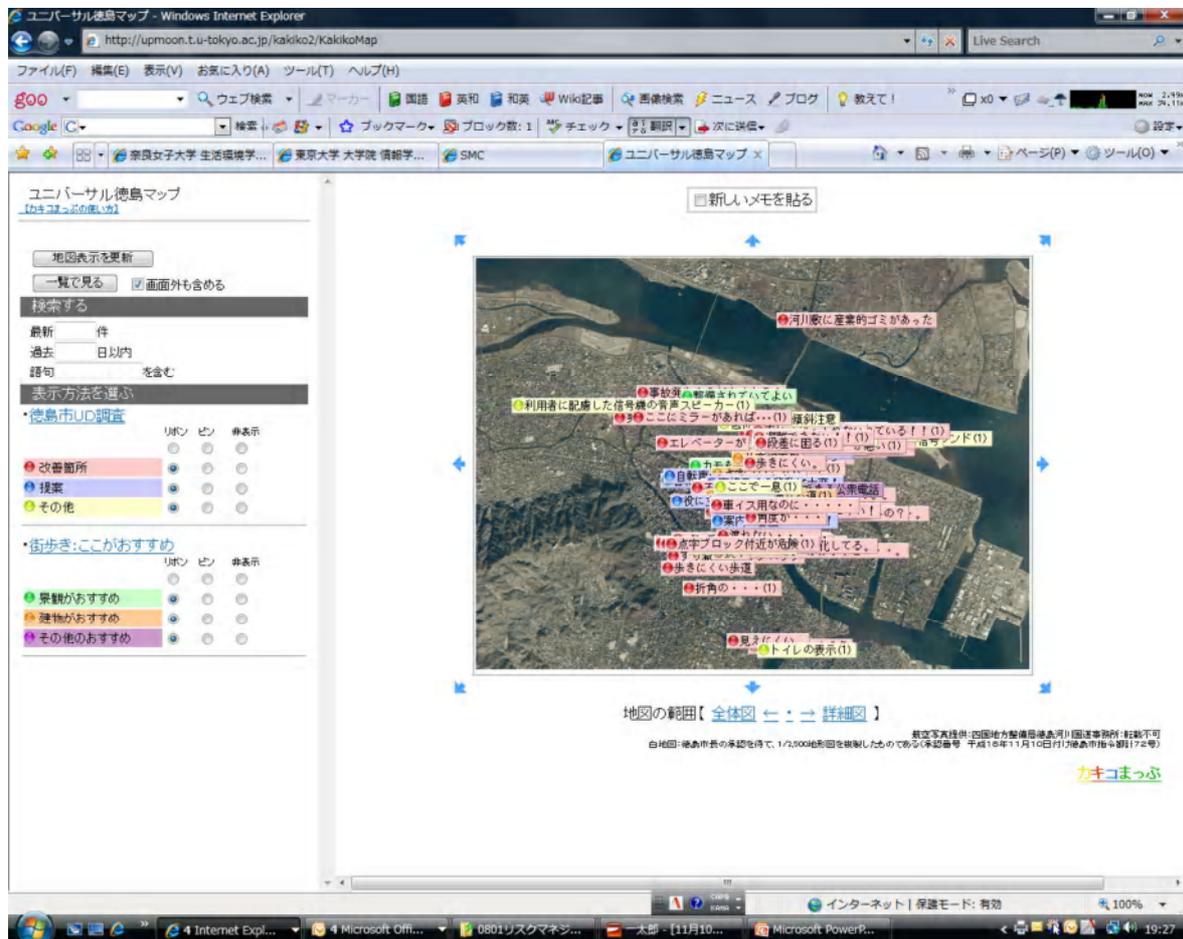
## 資料 1

(もとは、2007年11月10日実施の藍住町 UD 調査の報道向け資料)

ホームページ「ユニバーサル徳島マップ」とは・・・

徳島大学総合科学部と徳島県等が共同運営しているホームページで、インターネットを利用して、地図情報の上に、街づくりについての意見等を自由に書き込み、映像の添付、意見交換ができる機能を備えています。システムは東大都市工学研究室の「かきこマップ」を活用!

アドレス <http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/universal/tyuui.Html>



「ガリバーマップづくり」とは・・・

街歩きをした地域の地図を拡大し、畳1枚程度の大型の地図を班のメンバーで囲みながら、相談や発表用の加工をすること。今回は東京大学都市工学研究室の真鍋陸太郎氏が指導に当たってくれることになっている。なお、今回は、ガリバーマップに必要な写真は、photochatシステムによって提供される。この点については、次項目を参照のこと。

[http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/~nakamura\\_sr/gulliver/gulliver.Html](http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/~nakamura_sr/gulliver/gulliver.Html)

「photochat (フォトチャット)」とは・・・

京都大学情報学研究科西田・角研究室が開発した写真の共有システム。カメラ付き小型パソコン上で走るソフトであるが、無線LANのアドホックモードを活用して複数人が相互に写真を提供し合いながら「会話(チャット)」をすることができる。

<http://www.ipa.go.jp/about/jigyoseika/06fy-pro/mito/2006-380a.pdf>

<http://www.ii.ist.i.kyoto-u.ac.jp/~ito/photochat/photochat.html>